

◆八木健 選 ～古賀しぐれの滑稽俳句②～

天上の雲雀を耳が見つけたる

雲雀の特徴はその囀りにある。雲雀の姿かたちを言える人は、ほとんどいないのではないだろうか。高い所にいるから「天上の雲雀」である。あれが雲雀だと分かるが、それは姿かたちを認識してのことではなく、鳴き声である。この句の面白さは、「耳が見つけた」にある。「お隣のすき焼鼻が見つけたる」。

つぶあんに限ると親爺古茶淹るる

この句を読んで気づくのは、リアリティーの表現の巧みである。「古茶」もいい。新茶だとありきたりだ。古茶でこそ親爺である。「つぶあんがいい」と頑固爺のこだわりを描いて可笑しい。この句の滑稽は新茶とせずに古茶とした裏切りにもある。

時間とは人の世のこと蝸牛

俳句の特性の一つに映像をきっちりと写生する記録性がある。子規の唱えた写生という手法は今も俳句に引き継がれている。そして俳句はますますの展開を遂げ、句材も風物や花鳥だけでなく社会時評だったり哲学的だったりと多面的に広がった。この蝸牛の句は哲学的なものに感じる。擬人化しての社会時評ともとれる。蝸牛はせかせかと忙しい人間様を見てなぜにそんなに急ぐのかと笑っているに違いない。この句の滑稽は哲学的社会時評の面白さだろう。

食卓は主婦の文机さくらんぼ

作者にとっては、いつもの何でもない風景である。食事が終わるやいなや食卓は文机に変貌する。それは、作者が主婦から作家に変わることでもある。母親や妻としての役割をもった自分から、文人としての一人の人間になるのである。

降りる顔乗り込む背中駅師走

作者はプラットホームで電車を待っている。その間、おびたしい数の人が次々に乗り込み、次々に降りてゆく。師走の慌ただしさ、人混みが表現され、読者も同じプラットホームで見ているような臨場感を持つ。写生句である。写

生に徹している。

一頭のパンダに百の人うらら

パンダが日本に初めて来たのは、一九七二年、昭和四十七年である。日中国交正常化を記念して、中国からカンカン、ランランの二頭が上野動物園にやって来た。当時たいへんなブームを巻き起こしたが、半世紀近く経った今も人気は衰えず、祖父母の代から孫へと人気のバトンタッチがされている。「一」「百」の数字を使った効果も上手く出ている。

一輪の梅より森の黙を解く

森はまだ冬の装いで冷たく暗くじっと黙っている。しかし、その寡黙を一輪の梅がほどいたのである。梅の花の「小」と森の「大」の対比もいいし、春の訪れを「黙（もだ）を解く」という詩的表現にしたところも見事である。

一机上一書一硯寒灯

部屋は、六畳から十畳くらいだろうか。机は引き出しもない天板と四本の脚のみの簡素な机である。そして机の上には書が一冊と硯が一つと、灯りが一つ。写生に徹したことで部屋の空気の冷たさが伝わってくる。漢字のみの表記もおもしろい。

まつ先に光が春となりけり

「春は空からやってくる」と言われる。まだ多少寒くても空だけはやたらと明るい。なぜだろう、こんなに光が溢れてる。その明るさに「ああ、そうか。春が来たんだ」ということを実感する。そのことをそのまま句にした。ともすると春が来た、だからそれとともに光が溢れだしたという順で句にしてしまう。例えば「春が来て一面光の海となる」というふうに。この句は、まつ先に光が春となったことを詠んだところが新しい。

鶯の一声言葉とは貧し

鶯は「ホーホケキョ」の一声である。それに比べて人間はなんと多くの言葉をもっていることか。しかし、作者の価値観は、そこにはない。生き物、生命への敬意が根底にあり、言葉が貧しいことを言うことで、鶯の声や命の素晴ら

しさが際立った。

万の鴨湖面を剥すごと翔てり

俳句は、自分がどう感じたかを詠むものだが、その感じ方が肝心である。湖面が剥がれるというのは、写生でもあり感性でもあり、面白い表現である。

古賀しぐれ:一九五〇年、昭和二十五年、滋賀県生まれ。生家は大津市に二百年余り続く蔵元で、父親が高濱虚子を師と仰ぐ俳人であった。「しぐれ」は虚子の命名による。本格的に俳句を始めたのは父親を亡くしてからで、父親の葬儀の際、弔句の一句一句に込められた思いに感動したことがきっかけとなる。句集の『淡海』『大和しうるはし』など多数執筆。ホトトギス同人、日本伝統俳句協会参与、大阪俳人クラブ常任理事としても活躍。「未央」主宰。

* 「第九九回八木健の俳句遊遊」(愛媛CATV)の「今月の一句」で直筆の色紙紹介。